

近代文学研究叢書

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第七十一卷

平成8年10月7日 初版印刷発行

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	外山滋比古
印刷所	大文堂印刷株式会社
発行所	昭和女子大学近代文化研究所 東京都世田谷区太子堂一―七七 電話03(三四一一)五一二九番 振替口座0017017〇八六七

ISBN 4-7862-0071-9 C3091

価格はケースに表示してあります。

目次

口 絵	二
『近代文学研究叢書』の成立	五
凡 例	七
高 田 保	七
久 米 正 雄	七
相 馬 泰 三	七
福 田 正 夫	七
PROFILES	七
卷末付記	三六
高田保年表補遺	三六
第七十卷年表補遺	三六
索 引	四三

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて四十六冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶり、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の老大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の実地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢

書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の権威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会（学内における近代文学の研究）での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ペッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百七十五名を数え、本巻を以て通巻七十一冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭 太郎（演劇学）	池田 亀鑑（国文学）	石田 吉貞（国文学）
石森 延男（児童文学）	上井 磯吉（英文学）	上野 景福（英語学）
太田 三郎（比較文学）	荻原井泉水（俳文学）	片桐 顕智（和歌文学）
金子 健二（英文学）	金子 武雄（国文学）	河鱈 実英（歴史学）
木俣 修（和歌文学）	木村 毅（比較文学）	斎藤 一寛（仏文学）

佐伯 梅友(文法学)	坂本由五郎(英文学)	佐々木八郎(国文学)
笹沢 美明(独文学)	佐藤 幹二(国文学)	山宮 允(英文学)
島田 謹二(比較文学)	玉井 幸助(国文学)	辻村 鑑(英文学)
内藤 濯(仏文学)	中林 謙二(英文学)	成瀬 正勝(近代文学)
能勢 頼賢(国語学)	浜 徳太郎(美学)	人見 圓吉(近代文学)
本間 久雄(近代文学)	宮内 秀雄(英語学)	矢野 峰人(英文学)
吉田 澄夫(国語学)		

本巻には、劇作・演出・小説・随筆家高田保(明治二十八年三月二十七日〜昭和二十七年二月二十日)、小説家・劇作家久米正雄(明治二十四年十一月二十三日〜昭和二十七年三月一日)、小説家相馬泰三(明治十八年十二月二十九日〜昭和二十七年五月十五日)、詩人福田正夫(明治二十六年三月二十六日〜昭和二十七年六月二十六日)の、四名の研究調査を収めた。

凡 例

一 著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二 年表記載で、調査者が直接あたれなかった項目については☆印を付した。

三 各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出所、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四 表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五 引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記した。

六 年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。

高^{たか}

田^た

保^{たもつ}

昭和二十八年
二月二十七日
生歿

二八
九五三

三月
二十七日
生歿

一生 涯

Ⅰ 幼少期

高田保は明治二十八年（一八九五）三月二十七日、茨城県新治郡土浦町内西町四十八番屋敷（現、土浦市中央一―一五―四）に、父元重、母まさの五男として生まれた。俳号は辛軒、大居。高田家は代々土浦藩の祐筆であった。祖父元長は江戸詰めの土浦藩士鈴木家に生まれ、祖母は旗本の家に生まれたが、共に高田家の夫婦養子になった。元長は藩主土屋家の深川の下屋敷に勤務していたが、明治維新により、藩主の国である土浦に移り住んだ。後に廃藩となるに及んで家禄奉還金を得ると、煙草屋を開業した。保は『青春虚実』（昭26・12）の「系譜」の中で、祖父の墓には「蓮をみよ散りてもうかぶ花の舟」という辞世の句碑があったことを記している。また遺品の一つ「諸国交際往来帳」には、講釈師、連歌師、義太夫、清元、歌沢の師匠の名前があるばかりで、武士の名前は見当たらなかったという。風雅風流を好んだ祖父の一面が窺える。保は『人魂黄表紙』（昭2・12）の「自序」に「父は貧しき代書人であり、母は近在の名主の娘であつた。が彼の高潔な性格と彼女の純真な愛情とは、終始の僕に一方ならずよき感化を与へて」と記すが、父は一時鉾山の仕事にも関係したが、町内総代の役等も果たした。母は新治郡出島村牛渡の名主、山口家に生まれたが、後年活け花の師匠となった。母の兄常

太郎の長男山口剛は、後に近世文学の泰斗として早稻田大学教授となり、一方中国文学の訳業や隨筆の分野でも業績を示した。保は十歳年上のこの従兄から多大な影響を受けることになる。保は九人兄弟姉妹であったが、長兄、長姉、末妹は共に夭折した。幼い頃の彼の逸話は殆ど残っていない。人間嫌いの不愛想な性質で、強情な一面をもつ偏屈な少年であったと、高田自身述懐しているが、屋内遊びが多く友達も少なかった。ただ、父に伴われて祖父の墓参に上京した時など、浅草の繁華街では、特別生き生きとして娯楽的なものに強い興味を示し、また理に合わないことをされると、幼いながらもその事をはっきりと指摘するので、弁護士のお伯父が、この子を弁護士にさせるようにと進言した挿話が残っている。

口 中学・大学時代

土浦尋常小学校（四年制）から土浦尋常高等小学校（四年制）へ進み、三年終了後、明治四十一年に県立土浦中学校（現、県立土浦第一高等学校）に一番の成績で入学した。次席は後の作家下村千秋であったが、千秋の回想（高田保の中学生時代）文芸春秋 昭28・2によれば、保は町っ子なのに体軀はがっちりし、手と足は特に大きく、口八丁手八丁足も八丁という敏捷さで学校中を歩き廻っていたという。二年の頃から「太陽」「中央公論」「日本及日本人」等をはじめ、速度の早い読書法で図書室の本を好き嫌いなく読んだ。保らの中学入学と同時に赴任してきた当時二十四歳の精悍な美青年の英語教師北吟吉（後、早大教授、後に代議士）は、全校生徒を啞然とさせるほどの鉄棒の名手であった。三年の秋日光への修学旅行を引率した北吟吉は、藤村操が巖頭の辞を残して投身自殺

をした絶壁で、得意の逆立ちを試みようとした。生徒一同が顔をそむけようとした時「高田はさつとその傍へ寄り、その大きな手で先生の肩先をぐいと引つ掴んで引き起した。そして高田特有の苦笑をもらした。そんな真似は真の勇氣に非ず、蛮勇であり俠勇である、とその目がいつてゐたのだ」(高田保の中学生時代)。さすがの北吟吉も逆立ちを断念したが、この事件は美談として全校生徒の間に広まった。また或る時、北吟吉が中心となり、筑波山の登山を試みた。保は身体の釣り合いを破った大きな足で精悍な北吟吉と先頭を争ったが、その時書いた紀行文に、保の非凡な文才があらわれていたと、千秋は「高田保氏の渡仏を送る 一ことの餞」(文芸公論 昭27)に記している。また四年の時のポートルレース大会の折、僅か四分の一艇身の差だったので、その時ゴールの審判長は「五年の受持先生だったから、それぐらゐの差は無視されるところを、保ちゃんはその先生と重なりあつてゴールを覗いてゐて、そして真先に声をあげたので、物言ひはつかず」(高田保氏の渡仏を送る

一ことの餞に終わり、保ら四年組が優勝した。ひどくズボラのようにいて大事な時には先を制して人に隙を見せない所があった。ところでこの優勝組の四年は、高田を先頭に八疊敷ほどの赤旗をふりたてて街中をねり歩いた。その時敗者となった五年生達が乱入してきて暴力をふるい大事件となった。この騒動の件で、全校集会が開かれたが、高田は全校生徒をうならせ、涙を流させた程の名演説を行ったという。下村千秋はその偉大さを、生涯忘れ得ないと述懐している。『人魂黄表紙』の「自序」に、保は少年時代に抱いた夢について書いている。自分は性来他愛なきロマンチストであり小学校時代は、人生の詩を求めて、山間の静謐な所で角笛を吹くような大牧場の経営者になりたいと思った。中学時代は勇敢な植民地人たらんことを畢生の願ひとし、特に

南米のリオデジャネイロの風物に魅了されたという。保の多感な一面が窺えよう。

保の家庭は当時貧しかった。だが、一見ズボラのようにでいて、才気煥発人を飽きさせない話術と、行動力、旺盛な好奇心をもった保は中学在学中、常に中心的人物として多くの逸話を残している。

明治四十五年、中学の先輩で早稲田の学生の矢口達に誘われて、上山草人の近代劇協会の「ヘッダ・ガープラー」(有楽座)を観劇したが、これが演劇界へ足を踏み入れる機縁となった。中学卒業も近い頃、保の心を動かす女性があらわれるが、女性とは父の遺言による結婚を強いられており、保に手紙を残して去って行った。この恋愛は彼に深い傷痕を残している。大正二年、恩師北吟吉と従兄の山口剛の奨めにより、早稲田大学英文学科に入学。当時の同級には野田高梧、岡田亀三郎らがいた。早稲田に在学中の保は恩師や従兄の山口剛の期待に反して、学問にのみ熱中する学生ではなかった。独特の軽妙さで、教授陣容とわたりあい、また講義の途中で教授に妙な質問をして、教場を湧かせたりする等、友人と共にさまざまな奔放な生活を送った。作者尾崎士郎自らが指摘するように『人生劇場』の吹岡早雄のモデルは高田保なのであった。

八 浅草時代

大正三年に、楠山正雄や秋田雨雀が顧問の新劇団美術劇場に参加、高田は演技部に、宇野浩二は文芸部を担当し、以後宇野や片岡鉄兵と交流を深めてゆく。

大学時代に浅草の根岸興行主の家に寄食していた従兄の山口剛の所へ、高田は屢々訪れている。根岸興行の

初代は根岸浜吉で、明治十九年に常盤座を創立したが、二代目の丑治は更に興行の拡大を試み、金竜館、木馬館等をつくり、浅草興行界の中心的人物となっていた。高田はこの頃『オペラ評論』という極めて小さな歌劇雑誌の編集をしていたし、その後根岸寛一に手伝って小型雑誌『演芸』の発行をしたり、経営の企画管理にも」(神原勝「高田保伝」昭57・2)携わっていた。

大正六年七月早稲田大学を卒業し、山口剛の紹介で、映画雑誌「活動の世界」に職を得たが、後に野田高梧のいる「活動画報」の記者になった。同じくここから発行されていた雑誌「飛行少年」の編集にも携わったという。六年十一月二十日父元重が歿した。

早稲田を卒業の頃、致命的な失恋の痛苦に見舞われた。『人魂黄表紙』の「自序」によれば「この他愛なきロマンチズムをして、更に遠く南阿のケープ・タウンにまでも走らせやうとした」。またその事が一因ともなり、自らを平凡な流浪児たらしめ「大正七年以降十一年に至るまで、僕は全く漂々として風来の徒となつた。就中、九年前後の二ヶ年間を僕は浅草公園に暮した。人生落伍浮浪の徒は僕の親しき友となつた。夜を昼とし昼を夜とする放埒が僕の安らかな生活となつた。この間に依食したところは金竜館即ち浅草歌劇の世界」であった。また彼自身「とばした紙鳶」(『青春虚実』)の中にも詳しく記している。この頃の高田を金子洋文は、オペラの楽屋に甚だ不調和な「頭に宗匠頭巾をかぶり、女の苦勞でよごれた黒つばい和服」(『高田保氏の渡仏を送る宗匠の姿』文芸公論 昭2・7)を着、疲れはててはいるが、近代的な教養に磨かれた容貌であったと指摘している。

二 活躍期

大正十一年常盤興行の経営する公園劇場の文芸部に勤務、新国劇の世界に入った。彼はこの頃を結局自分にとって「虚無的自棄の心むなしき肯定であつたに過ぎない。無意志と無氣力の生活の中に潜む快き媚薬の中毒であつたに過ぎない。がこの時遂に僕の前に妻が現はれた。彼女が遂に僕を喚起した(『自序』人魂黄表紙)と述べている。結婚の相手は根岸興行主、根岸丑治の長女むめであり、高田より年上の未亡人であつた。むめの夫哲は入婿として根岸興行部で活躍、むめとの間に三人の子(うち一女は早逝)を得たが、大正六年九月に病歿した。将来への不安を抱きながら本郷の棒館に下宿している高田を案じ、年上のむめはその身邊の面倒をみるようになり、むめの赤坂台町の家に彼は泊まる日が多くなった。

同十一年帝国劇場の懸賞脚本の一幕物に高田の作品、舞踊劇「案山子」が入賞した。なお当時高田は、一方で菊富士ホテルにも宿をとっていた。『本郷菊富士ホテル』(近藤富枝 昭49・10)によれば、高田の頬には齒槽膿漏の手術の傷跡があり、それを誰もがエクトプと見紛うほどの快活な青年であつた。高田の部屋は新館の二階三十五番で、或る時まとまった金額を手にした高田は、かねてから欲しいと願っていた時計を買うことにしたが、しかし実際には陸軍用の望遠鏡を購入した。正面に見える帝国大学の時計で時間は間に合わせ、彼は専ら望遠鏡で近くの女子美術学校の教室を、また菊の湯の脱衣場などを覗いた。その事を知った女子美の学生は、鏡を反射させて高田に応酬、彼もまた鏡で応戦した。ホテルの同宿者は高田の部屋で望遠鏡を覗いては談笑し、彼

の軽妙な寸評に魅了された。宇野浩二を菊富士ホテルに紹介したのも高田であるが、このように多くの文人らが下宿し、同ホテルの不思議な雰囲気は独特なものがあつた。

大正十二年九月関東大震災によつて、浅草の公園劇場が焼失したが、これに代わつて翌十三年に、赤坂溜池に新設したのが演伎座であり、高田はここに勤務した。むめは父親に反対されての結婚生活（入籍はしなかつた）ではあつたが、一向にものを書かない高田を激励し続けた。その執拗さに根負けし、一気に書き上げ、岡栄一郎の推薦によつて発表した「天の岩戸」（新小説 大13・9）は、誌上に掲載された彼の最初の作品である。大正十三年はこの他に「内幕話」（文芸春秋 大13・10）等を執筆。十二月には白井喬二原作「富士に立つ影」を脚色、十幕二十数場という膨大なものであつたが、短く圧縮し、翌年元旦から演伎座で上演、大好評を博した。しかし演伎座は一月二十日に全焼してしまふ。十四年四月「文芸日本」に「商売主義」、五月「王様と骰子の目」を発表し、「演劇新潮」の二月号に「ジャッヅ」を、九月「新劇」に、「哀しき三人の悲劇」等を執筆した。また前年にひき続き「文芸春秋」六月号に「噂ばなし―僕の心配」、八月に「寝ころんだ随筆」等を書いて、以後「文芸春秋」との関わりが多くなる。

大正十五年正月、新国劇公演で「天の岩戸」が邦楽座で上演された。三月に演劇専門雑誌「テアトル」を発行。高田は一号に「公園の午後」、三号に劇評等を発表した。同誌は他に、菊池寛、広津和郎、宇野浩二、川路柳虹、片岡鉄兵、秋田雨雀らの作品を掲載したが、経済的事情により三号で廃刊となつた。四月には文芸春秋社が「演劇新潮」復刊号を出し、高田は三宅周太郎、竹田敏彦、関口次郎らと編輯同人となる。一方四月の